

# 震災・原発事故の中、地域と共に奮闘する企業

## 相双、いわき、白河地区で奮闘する会員の姿をお知らせします。

### 不明者捜索や瓦礫撤去は、自衛隊や警察と共に、地元建設業者が担っています。

#### 石川建設工業(株)

代表取締役社長 石川 俊さん

(相双地区)



▲石川俊さん(5月20日)

石川建設工業(株)は、福島県と防災協定を結んでおり、この度の震災では、直後より被災地復旧に自衛隊や警察と協力し続けています。

3月11日の地震の時は、工事現場で多くの社員が仕事をしていました。社員の命は助かりましたが、沿岸部の現場は津波で全て流されました。自宅が流され、ご家族が未だ行方不明のままの社員もいます。

石川さんは、翌日から自衛隊や警察が現場に入るための道路の瓦礫撤去作業に従事し

ました。しかし、原子力発電所の相次ぐ爆発で作業は中断、16日に一時避難しましたが、18日には現場に戻ります。その時は、南相馬市民の殆どが避難しゴーストタウン化。物資等も滞る中、石川さんも単身で仕事を続ける日々。

自衛隊や警察と共に、不明者捜索の現場は地元建設業者が担っています。心労の絶えない現場です。警戒区域内の作業は放射線リスクが高いですが、線量計の数が足らず1チーム1個。防護服は支給されませんが足りない分や毎日廃棄するマスク等は自社負担となっています。社員の安全対策は全て会社の責任。スクリーンングを毎回受けてから帰宅させています。仮置き場の瓦礫の今後の処分先が決まっておらず、そのままにしておく

と衛生面が非常に心配です。夏を迎えて現場の熱中症対策



▲2ヵ月経過するもまだ瓦礫撤去が手付かずの所もあります。写真は原町シーサイドパーク(5月6日)

も必要です。石川さんは過酷な現場で従事している社員の健康に気を配ります。

緊急時避難準備区域のため、お子さんが福島市の学校に移る事になり、家族ばらばらの二重生活です。社員さんらも避難所からの勤務など負担の多い生活を強いられています。また、石川さんはこの間、多くのお知り合いに南相馬市の現状を定期的にメールを配信し続けました。避難先や全国の中からたくさんの方の反応があり、本人も驚いたとの事ですが、受信していた方に聞いたところ「南相馬へ戻るタイミングは、石川さんからの情報を頼りにした」との事。大変正確でタイムリーな情報配信でした。

今後の復興の為、地元での雇用対策にもなりますので、行政とも協力し、仮設住宅の建設は地元の業者で協力する段取りをとっています。

福島県の災害対策本部の支部を南相馬市に設置して頂き、復興事業は東京で考えるのではなく、方法、予算も含め地

## 子供達の学校給食を守る、それこそが我が社の使命

#### (有)今井製パン

代表取締役 今井聖訓さん

(いわき地区)

(有)今井製パンは、いわき市

で小・中学校向けの給食パンを製造していました。3月11日の東日本大震災で発生した津波によって四倉町にあった工場の1階部分は浸水による大きな被害を受けました。機械類は使用不可能になり、当初は事業を継続するかどうかを悩みました。

そんな中、一番最初に子供達の顔が浮かんだそうです。一万食もの給食パンを供給している自社が廃業したら、代わりの会社はない。さらに、周りの人々の温かい励ましか

元の人が考えた内容で出来る様にして欲しい。と石川さんは訴えます。

らも後押しを受け、今回震災で閉鎖することになった錦町のパン工場を借りて、学校給食再開に間に合わせる事ができました。

まずは思いを先行させ、学校給食へのパン供給を守りましたが、資金繰りのことなど、厳しい現実突き当たりました。そんなときに、同業の間である相双地区会員のパートナーの只野さんから、同友会からの情報で助かっているとの話を聞いて、事務局に経営相談へ行き、会員企業の社労士や税理士を紹介してもらい、適切な手を打つことができました。

今後のことは、まだ決定していない状態ですが、『子供達の為にも前向きに、周りの方々の励ましや助けを受けながら、会社復興を目指していきたいです』と語る今井さんでした。

(レポート/有)窓花

渡邊久美子



▲取材を受ける今井聖訓さん(左)



▲子供達の笑顔の素「コッペパン」

# 被災者を救う木造仮設住宅

―県産材を使い、地元の人 が建てる―

## 藤田建設工業(株)

代表取締役 藤田光夫さん  
(白河地区)



から馬相(右)さん、藤田光夫さん(左)を説明する

えっ？これが仮設住宅！普通の住宅とさほど変わらない躯体に驚くばかりか、プレハブには無い、木の持つ暖かさや安らぎが感じられて感動さえ覚えます。しかも、地元の八溝杉を中心とした県産材を使用し、加工や運搬に係る仕事も、仕事が薄くて困っている地元建設業者や実際に被災して避難してきている人たちが雇用して進めているところが特に注目する点です。



パネル製造風景



杉板と漆喰を組み合わせた趣のある外観に

ト。ちょうどその時、藤田さんは福島県南の製材やプレカットをしている方々から「関東へ材料を出荷したら、放射能に汚染されているのではなにかと返品された」との声を聞いて、これら地元材料を使えないだろうかと思ったのがきっかけだったそうです。

今回、建設業協会が県から木造Bプランで230戸分を採用された理由の一つには、藤田建設工業が展開する注文住宅「e・home」で培った「技術力」と「住む人を第一に考えた優しさ」が活かされているのではないかと感じました。現在、同社では仮設住宅用のパネルを1日あたり2・5〜3棟分を急ピッチで製造中。夏涼しく、冬温かな居住性の良い仮設住宅が被災者の方々へ届くのももうすぐです。(レポート/榎マザール)

鈴木成保



## 広報委員 大竹雄一の俺に言わせろ!

日計産商(株) 大竹雄一

東日本大震災からそろそろ3カ月が経とうとしています。福島県においては震災の他に原子力発電所の問題があり、放射能と風評被害という2つの問題が加わり、大変な苦労を強いられているというのが現実です。しかしながら3カ月と言う時間が少しづつではありますが、問題に関する考え方や対応の方法、さらには新たな問題と状況も変化してきているのも現実だと思えます。

ちよつと話を原発問題から前に戻しますと、元々は3月11日の震災から始まっているのは誰しもが分かっている事だと思えます。その震災を多くの方が「未曾有の大震災」と言い、1、000年に一度の大震災だと言われているのもご承知でしょう。

な震災だったのではないのでしょうか？そんな状況の中です。もし、この事態を人災と思っている方がいたらちよつと立ち止まって考えてみてください。自分がその立場で判断しなければいけないとなった場合、自分ならどう考え、どう行動したか。政府として大前提に国民に対して、平等に物事を考え、誰一人として人命をも尊重するのが基本になっているのだと思えます。その条件を考えれば「隠蔽・操作」では無く、「確実な状態での情報しか公開出来ない」と言う事になるのだと思います。